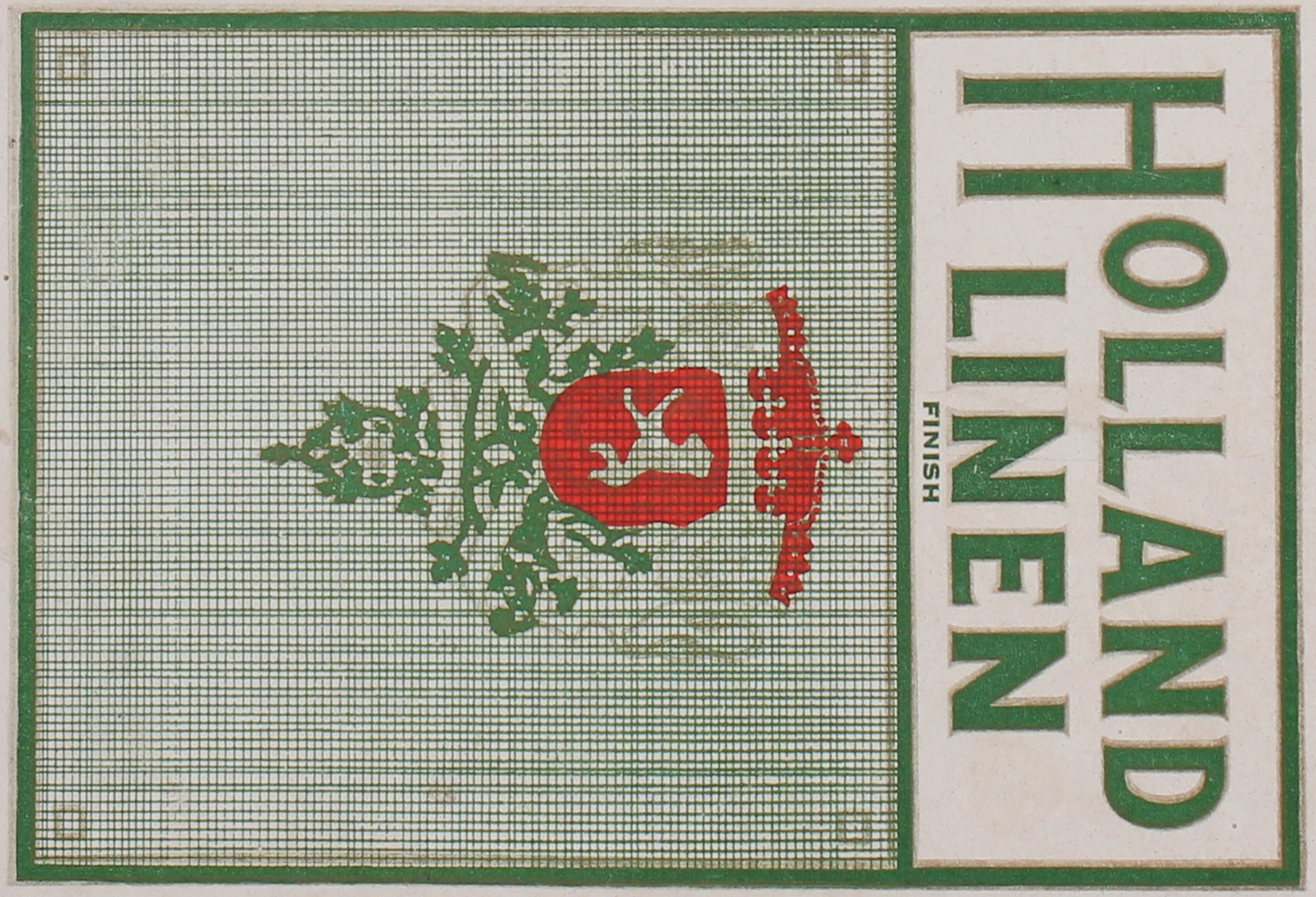
NO. I. SENRYU — JAN. — 1944



一九四四年、一月、第一号

「城南雑詠集」

昭和十九年　一月一日　1943.1.1

定、一日三句以上必ず作句する事

一月一日

つゝましく祝ふ配所の第二年

二回目も配所で拝む初日の出

雑煮餅第一線の子を想ふ

雑煮たゞけ正月らしいメスの初春

お供もしるしはかりの特住所

配所にも嬉しきまよ杵の音

一切れの餅へ新な初春の味

盛裝も久方ぶりの年始め

初暦月日に祈る事多し

形式の年始廻りはやめにする

取交す御慶も何か物足らず

年中の無沙汰御慶にこめて詫び

御無沙汰の挨拶をする年始め

四十一切れの身も初春なり雑煮餅。

更生の意氣元旦の朗らかさ

新生の決意に燃ゆる年始め

希望

天◎

一月二日　歪む

無意識に辰巳歪む寒さなり

○潔癖は額の歪も氣に入らず

○旗竿も歪んで見える暴風の日

一月三日

去勢されやっぱり伸る希望なり

嬉しさが後ろつきにも見ゆる宵

春植た樹が踊られる旋風

一月四日

ブラックの庭木揺ぶる雪模様

朝迫に道も埋まる粉吹雪

森羅萬象は只一色の雪の朝

一月五日

目醒しを覚ます音浅ゆる夜の静寂

出帆の銅羅ケーブルを巻きおさめ

客 ゲートルに個性が見ゆる巻工合

一月六日

金婚へ一家参族打揃ひ

卒業式みんな揃ひのガウンなり

又危篤憂に揃ふ勝頭

一月七日

感激に勇み往く子の目の温み

默禱へわからぬながら頭を下げる

籠の鳥時鳴かず飛ばずに早や二年

一月八日　愚

○この上の愚は男子を産んでくれ
○この上の愚は初孫産んでくれ

浅間しさ片身わけにも出る個性

會談はちゃんとして置く皮算用

おふくろの
母親の愚は今年も同じこと

親の愚子供等うんとえらくなれ

兄の愚は腹一杯に母の乳

○食慾がなくて困しいメスの鐘

一月九日（上）

上見れば限りなき世に目をつむり

この上の頼りは二世あるばかり

客。天國はあそこに見上る天の川

上下の温度が違ふ日本風呂

。やこしい物を冠せる美容院

一月十日

聖誕の賀状は外部から浮世から

「帳羅用祝」たけに纏ふ服

冬立ちて何とはなしに落着かず

一月十一日

女の子何につけてもよく笑ひ

つながれた馬は道路を横塞ぎ

神童も凡人になる四十過ぎ

一月十二日

サンタへの子等の白紙はノースポー

美容院　はかまし見たいを冠せられ

エチオピヤ皇女を思はす髪かたち

和歌

行き暮れて木の下蔭を宿とせば
花を今宵の主とはせむ

一月十三日　田顧

年の瀬に過ぎこし方をふりかへり
回顧する二年前のあの騒ぎ

○若き日を思へば耿る事ばかり
寄○華やかな過去思ひ出す柵の中

○立退た頃を偲んで湧く涙

數々の悲話を綴った回顧録

一月十四日

日本人虚礼は何処へもつき纏ひ

心境も自然と変る柵の中

急逝のデマへ早々弔辞のべ

一月十五日

○更生の気持希望は持ちつづけ

○㊏悪い癖眞似る我兒に苦笑ひ

○㊐苦笑ひ父にもあったマーマンス

一月十六日

○前を往く女(ヒト)見とれて蹴躓すき

○仲たがひそっぽを向いて通りぬけ

一月十七日　萬一。

萬一の用意に妻は別に貯め

萬一に備へ保險もちゃんと掛け

萬一の時は家作も自放す氣

一月十八日

萬一の覺悟が出来て氣が安い

萬一（キヅカ）

儀倩を頼る我身の腑甲斐なさ

秀。

萬一の時はと母の苦勞性

一月十八日

生還は期せず健氣に征く矢土

帳尻の合はぬところは雜費とし

一月十九日　（新生）

客○これからを生れかわった氣で勵み
新生の門出に空が晴れて居る

1944

新生の氣持で迎ふ三年目

天◎更生の意氣元旦の朗らかさ
新生の意氣どっしりと時期を待つ

新生の前奏神痛まだ續き

客○新　希望に燃ゆる年始め
更生の決意
一月二十日

言へば憂し言はねば淋し倦怠期
霏々と降る雪に老の身いたはられ
憂き事のまだ續きそう水飢饉

一月二十一日

客　○宿命にしては人生寂しすぎ

○貧乏を追ひつ追はれつ道を渡り

1944

ポイラーのストライキ

試練かは知らねど湯なく水もなし

一月二十二日

他家の飯喰つて娘達も知る世間

應召旗がずを誇つて窓に下げ

身ごもつた妻に試練の日が續き

一月二十三日

我堂が也一人殖えた子澤山

娘もう恵知り初めた髪かたち

ホームランしばし柏自は鳴りやまず

一月二十四日

身の異状同様の日へ指を繰り

心身の異状眠れぬ夜が續き

何処彼と銃後もやはり異状あり

秀。

何事かあった街路の人だかり

年の瀬にはるか孫算の上をこし

秀。ボイラーの異状零下にお湯がない

一月二十五日

薄明り餅韻を引いてメスの鐘

化粧したニグロを見ればそっとする

不意の客自土産なんと暗に落ちず

一月二十六日

住み馴れてセンタもやはり良い所

○移動する身も捨てきれぬ採集品

○立退く日名残に島を一巡り

嫁ぐ娘を母は前から後から

發つ朝の寸暇花壇に水をやり

置て来た物へも未練が夢となり

一月二十七日

何のその此の身この意氣火と燃ゆる

蹲伏する身に也潮は高鳴りて

逆境も何の男子の腕だめし

一月二十七日

白紙では足りぬ我子の初笑ひ

客○ 初笑ひ育児日記にしかとつけ

氣に染まぬ初春もほぐれる初笑ひ

侍は配所の初春のさんざめき

人◎ 氣不味さがほぐれる孫の初笑ひ

一月二十九日

縦横の柄が好みの娘の晴着

縦横にデスクを入れて地拵へ

○ 元祿の模様が可愛い踊り子

縦横に電波地球を駆けめぐり

一月三十日

一月十六日 柳人野間一汐君東都へ遊学出発
峯吉が故郷になる大飛躍、
さらば君沙港で會はう平和の日
右二句送別吟

再會は沙港と決めて手を握り
熱血兒心は躍る新天地
往けよ君二十四州が待って居る
一月三十一日

出鱈目の記事と思へど案にかかり
捏造の記事へ今更ら目を見張り
移りゆく世相を日々の記事に見る
素晴しい記事で読者の目を奪ひ

二月一日

若夫婦人目がうるさい句をはなし

悲雨悲風また続くらし苦難の日

母親の添寝の足りる兒の病氣

二月二日

二十年逆戻りして又工夫

落ちぶれた未だ第位は捨てきれず

集會に来ても女は何か編み

二月三日

茜雲雪の連峯へ夕映へる

編みかけて肩へ掛けたりすかしたり

洗ぎ物しこたま貯める獨身者

二月四日

○ 龍巻の行方を追へば「青い空」

落着いて見れば笑止な事ばかり

不意な風物子とられた慌てやう

二月五日

朴星をいつものとこへ見る今宵

○ 次々に消える理想をやはり追ひ

現在火切まもまた大切

二月六日

國策添へと轉住すゝめられ

朝まだき闇へ兼ねの炭を焼べ

齢五十しみ〳〵覗く初鏡

二月七日

四十五、未だこれからだ　これからだ

逆境もなんの花咲く春間近

日曜日　たまは静かな洗濯場

二月八日　ハート山吟社へ

急病に医者よ薬と大騒ぎ

○前觸れもない来客に妻慌て

○突然に来た電報を取り囲み

翼弱き中にはさんで渡り鳥

○縄飛びに母も加はり春ちらら　る　お正月

飛ぶ雁の故郷はいつこ北南

次々に飛ぶ日たあれは爆撃機

二月九日

飲み薬又取りかへてよくなる氣へ
責任を感じ風邪氣を押して出る
客○安にすねた同士やつぱり氣が揃ひ
物事をはつきり云へぬ氣の弱さ
○いつしかに妻も氣にする時事ニュス
ラジオ又ジヤズに変つて氣が光り

二月十日

○將来を想へば遠ふ事ばかり
見透はつかぬが計畫だけは立て
妙齡になつて憧る未知の幸

未知の人ながらなつかし國訛

想像はしても未来はわからない

○再移動地図へ不安な瞳が集へ

二月十一日

或る時は天下をとった氣にもなり

客○嚴かに時の裁きを待つばかり

時々に変る世相へ目を見張り

時事ニュス間き流すまい近く寄り

あの時の間抜に氣づく帰り途

○遊学の娘の荷造りへ二時を聴き

村里が眞上に坐る午前二時

二月十二日

地◎ 氣強さは次代を擔ふべ〻の數

客。 配所でも明日の希望に強く生き

客。 生返事娘は鏡台に向いたまま

渡辺柳雨氏歡迎句

親柳移植して氣強い川柳

二月十三日

行人の影も疎らな雪もよい

カーテンを又取りかへて待つ平和

○ 處女と云ふ詩り減多に中利かも あて遠慮かち

二月十四日

洋裁がまだぎこちない歸朱の娘

出戻りの春といふのにふさく居り

良い女そのお愛嬌惜しまれる

二月十五日

三女幸子奨学金を得て東部へ遊学す

○願望が叶って発つ娘喋れくと

ロッキイの風よ安かれ初の旅

父と母無言の裡に待つ便り

二月十六日

花嫁の一段氣高い白つくめ

不寝の番今夜も星座を一わたり

○ポンチ絵を何と礼かれて行詰り

日本赤十字社部在留同胞へ電報の出見舞

遥々と着いた見舞に眼かうるみ

夢にまで望みし味覚甦みかへり

別

賀門品 二月十七日

別看

赤道を二度もくぐった亀甲萬客。赤道を越へた見舞のお茶の時

知って居てやる悪戯をもてあまし

二月十八日

難關は覺悟一世の潔きよし

自覺して二世笑って難に往き

自覺して意慮する氣がまた死り

二月十九日

自覺した心算がやはり迷ってる

自覺して土壇場に慌てない

自覺して矢張り無駄な冊の中

二月二十日　「有望」

向学に心、燃える子の前途

有望と申込みかつて転住し

有望な事業の世間は見逃さず

系を引けば萬更でない娘の返事

性質も素行も無難娘は嫁く系

備はり俺等まで入れるのか不審

大学を出れば仕事が待つてゐる

二月二十一日

服装へ嬉しく辛く縫ふ産衣

盛装で教會へ行く獨身者

川の字に寝ると言ふたは昔しなり

二月二十二日

秀の　何も彼もお上任せの風が吹く

青い空高原の雪陽をはじき

雪景色戸棚の猪口が淋しかろ

三月二十三日

此の時局悩みは深い皮膚の色

成功して従軍はとこの數が殖え

憂い事後ろつきにも見える母

二月二十四日

もう父の身はおえない拘ねはじめ

親の業も知らぬ娘を齒痒がり

民族の浮沈だ頑張れ若人等

二月二十五日
運命か知らぬがまたも保線工
客。生返事娘は鏡台に向いたまゝ
鏡台に化粧さ中にドアのベル
風邪の床鏡に埃の積んだまま
二月二十六日
客。失敗のその都度不運にして仕事い
地。失敗は成功の基そうかしら
住。失敗の度に親父の皺が殖え
二月二十七日
秀。暮債の漫画は我が田に水を引き
父さんの顔が漫画によく似てる

二月二十八日

螢雪の功これからか活社會

親の恵も知らず娘達は遠く住み

遠くから歸省した子は勞はられ

二月二十九日

○素人を馬鹿にしきった香具師の面

お餅は素人らしい撥拠き

素人と見へぬ品の使ひ分け

人◎素人藝見てゐる方も汗が出る

素人にしては素敵な咽喉を持ち

草相撲本職よりも面白い

住○

昭和十九年二月十一日午前五時
黒川剣突先生逝去さる　追悼句

○親柳春にそむいて又枯れる。

川柳に何故につれないハート嶺

無常風又吹き荒れて師を奪ひ

人生の果敢きまたも香の煙

師の君は春にそむいて逝き給ひ

○師の君を偲びて追慕新なり

篠崎白峯兄　初孫を擎げらる

初孫が出まして嬉しい艶白髪

○初孫に白峯さんの瞳が細い

初孫へまだお祖父さん若過ぎる

三月一日

面瞻をはたいて居職書に立ち
浮腰は草相撲でも弱いなり
轉寢は惜しいところで夢が切れ

三月二日

大野草宮未大蔵師趣 おさる

葬式も造花ですます世の遷り
バラックの空に水仙春を告げ
イセエビ風もめつきり春となり

三月三日

節句でも雛も飾れぬ柵の中
躑躅花も退た頃想ひ出し
ぽつてりと椿が落ちて黄昏れる

三月四日

チューリップにょきりと頭あげて咲き

道ばたの草にも花咲く春となり

詩司詰の席に髮の香むせるよう

三月五日

無雅作な髮に弾む若さなり

霏々と降る雪へワーテン雲へ立ち

素晴らしい理想を抱いて嫁き遅れ

三月六日

吹寄せの湯場に見物通きかへり

眼にしみるシャンプで子供泣いてゐる

女房お世辞もいいが晩達者

三月七日

動作にも個性が見へて面白し

利己主義の個性出世の邪魔になり

○変人にされて到頭五十年

三月八日

我の強い同士で交渉纏らず

頑固なで餘生を暗く生きてゐる

○共同の企業に個性出したかり

三月九日

客○赤道を越へた見舞のお茶の味

○真情のこもった見舞に湧く涙

三月十日

○方角が立たず一服吸ひつける

客○踏み迷ひ立木でも方角定むる業

面影は昔の儘の夢の母

三月十一日

面影のかわらで年の積れかし

カフェ酒酔ふて唄った思ひ出

人○假住居優勝カフェの飾りどこ

三月十二日

○春なれやしなひたる潮も高鳴りて

若い身で春にそむいて悔み續け

誘惑をされても見たい春の宵

三月十三日

浮雲もめっきり春といふ姿

猫柳春さきかけて銀光り

憂鬱なセーシも流石春の色

三月十四日

沙漠にも春が来ました猫の恋

柵の中礼儀作法も知らぬなり

夜番事務所の女性

10 不寝の番誰様らめ廻椅子

三月十五日

事務室は女性の白い潮へり

自の届く限りは荒すい点々

骨膜に達して示談整はず(深い)

三月十六日

熱の子へどうにもならず妻と泣き

サンタ奪ふ日本ならば風の神

三世に日本名が減りちと淋し

三月十七日

メスホール女給の頬に貫くところ

ウエトレススタイルショウに出る案持

先刻まで黙々こねました溜め涙

三月十八日

道具屋は不精無精に客の前

曖昧な返事で刑事うさんかり

○五分ばかり刈ったところで子が拗ねる

三月十九日

刈り止めて床屋に覗くヘアーライン

刈り過て若い床屋が詫てゐる

○鮮やかなフボ全見せるハイジャンプ

三月二十日

○鮮やかに仕舞を見せて幕が下り

客○板前の日除を見せた生造り

○聞上自先を言はせる子の寝言

三月二十一日

寝言から妻に弱點握られる

夜中に傳の寝言にはつとする

○ワーテンを好きでやってる柳に言ひ

三月二十二日

民衆保護名目はよしポリスマン
仰山に怒鳴って貰れるエキストラ
憐みに馴れる子達を淋しがり

三月二十三日

イウエの家富自動車まつかせ
お金惜ずらり並んだ美容院
運送屋器用にトランク歩かせる

三月二十四日

名案が湧いてぱらりと腕を解き
敲くとそのパンツで知れる獨り者
請願も抗議も今更ら詮もなし

三月二十五日

バンダナの柄で見分ける處女既婚

腕時計女がはめて艶めかしい

カラコロの音もなつかし風呂歸り

三月二十六日

墓ばかりかちゃれそうな月給日

婚約の時なるほど指にはめ

三面記事射撃しのばれる

三月二十七日

○ 書寢した跡へ銅貨が落ちて居る

一杯が五臓六腑に沁みわたり

○ 編棒をおけば三ミシンと妻の靴

三月二十八日

こくめんに妻靴下を綴るなり

蹴き運河に銀波が躍る十三夜

混線に呼出しちょっと面くらい

三月二十九日

書き損ね棒引いて出す子宛紙

静寂と更けてきやっぷは夢の中

一切は嫁に任せて家は無事

祝田村深雪氏長男結婚

三月三十日

姑は孫更らに朝寝すきもの

慶祝は三代揃って

ポロ株に投資したのを悔しがり

三月三十一日（無意味）

注

○前後の考慮もなく出所する

○行つりの女性（目礼交しけり

何氣ない言葉の波紋（ハモン）に かゝり

四月一日

客○自袋を脱いで疲かつと出る

○自袋の汚れで知れる年雷工

◎柳友田村深雪女の長男結婚されて祝吟

隆盛は三代揃ふて高砂や。

四月二日

咳をして長廣舌を振ふなり

不良兒に相槌打てうとまれる

寄せ書に皆それぐの個性が出

◎故村岡鬼堂氏一周忌追悼句

極楽路梅の下で想を練り
極楽路百花爛漫鳥歌ふ

四月三日　煙

決心がつかずポかく喫って居る

相談へそうかしくと煙の輪

粉煙草葉巻も同じ煙が出る

禁煙のどうやら今日で丸三日

紫の煙の中で物案じ

女秘書煙扇はらえ持いて椅子につき

無風帯煙天までつかへそう

重重に煙立ってゐる

四月五日　（所）

住

○吹寄せは娘等の徳緻も貴る所
住み馴れてセンタもやはり良い所
我骨を埋めるは他はいま何處

住

○漠沙原今は（萬）住む所
物案じ往きつ戻りつ同じとこ
残雪で諸所玻璃なり春の山

四月六日　（芽）

柳の芽春さきかけて銀光り

住

○雪の下麥の新芽のたくましい

住

○蜘蛛の糸芽から芽へと張り渡し

物の芽が地殻を破って伸ぶ力

運勢を草花の芽になぞらへる

菊の芽を花壇に見つけ杭を立て

生命の躍動新芽に見つけたり

四月七日　（春）

土の香も嬉しく春の野邊にたち

春の雪何とはなしに氣が輕ろい

○吹く風もめつきり春の肌ざわり

春の陽をうけて水仙白ふなり

颯爽と乙女の歩みに春を知り

春眠へ何の容赦もメスの鐘

◎故本多華芳、村岡鬼堂両先生を偲びて

四月八日

華芳、鬼堂南無や浮土の花祭り。

○ 退屈なあまりふらりと宵を出る

退屈

退屈なとこへひょっこり友が来た

獨り者為る事もなく寝ると決め

所在なく冬陽に坐して思ふ過去

客 ○ 退屈なまゝに片言抱いて出る

天 ◎ 退屈のやり場奉仕の汗に居る

四月九日

考慮

歸還の日考慮に入れて造る箱

考慮した心算がやはり悔まれる

考慮の餘地があります轉移說

住　○考慮の揭句斷然　否に決め

住　○孫の數考慮に入れて買ふ土產

年寄の考慮やはりそつかない

四月十日　（好奇心）

急用の途中で覗く人集り

好奇心ファンダンスも一寸覗き

好奇心姉の白粉ちよつと刷き

好奇心そそり買はせる三文誌

好奇心慾しの持ひ買ふ馬券

四月十一日

○ 陽の熱で窓邊の花が少し伸び

○ 看護婦は平熱ですとあつけない

人◎ 熱っぽい頭にやたらドアの音

四月十二日

途中から見知らぬ奴と連になり

人◎ 怒鳴り込む心算途中で氣がくじけ

○ 嫁く娘に噛んで含めるやうに母

四月十三日

○ 母の顔じっと見詰めて乳を噛み

○ よい智慧が浮んでガムを噛みやめる

○ 獨唱の終りは長く震はせる

○ナスの鐘終の一つを自暴に打ち

○終幕の芝居ぼつぐ〳〵席が空き
四月十四日

電線にだらりと凧の赤路なり

柵の中世に出る希望持ち續け

逃げ樓で石投る子へ犬呻り
四月十五日

黄ひ飯天張り変らぬ脂肪過多

立話子はエプロンにぶらさがり

最高の母性愛見る輸血台

緋牡丹は國民性にちと遠い

四月十六日

二三日はポケツに帶る普通便

役所から来た封筒におどされる

局のペン或る程物品不足だね

四月十七日

ともすれば時世を呪う悪疫となり

青山はあれど我骨埋める所(とこ)

大勢に抗せず二世の飲む涙

四月十八日 靜寂

○ 不寝番ひつそり闇と夜は更ける

萬籟は聲なく月は冴えわたり

默禱の間ことりと音もなし

夜の底時計の刻み耳に消え

葬式をすませた夜の静かなり

聖壇の祈禱り牧師の聲ばかり

四月十九日 半分

お土産の半分わけて兄不服

パンダナを半分覗く片靨

○ 半分に聞いても戦果大き過ぎ

子の話半分ばかり母も使ひ

假橋の半分どこで立往生

○ 鬼ヶ島半分どこで子は~~鞠~~鼾

四月二十日　（合點）

早合點たごの噂に荷を運め

○娘の素振り合點の往かぬ事ばかり

客⊙　聞き分けて獨り寢見が不憫なり

合點の上で嫁く娘のほそぐと

小五月蠅く云ふ母に娘はうなつきぬ

合點はしてゐる子供のもう忘れ

四月二十一日

子供等の騒ぎとたべて夕暮れる

縄飛の小女彈んだ若さなり

褒められてきまりが悪い客の前

四月二十二日

習癖は怖ろしきかな不気味な瞳

再會のとっさに名前が浮ばない

○

蝙蝠の時期セイジの道を遠くさけ

四月二十三日 (月)

拗ねる子の力を母はもて餘し

○

物の芽が力杯春を伸び

「コツルイン」とたんに力とっと抜け

ありたけの力で頑張る腕角力

秀○ 勢杯咲いても芋は芋の花

力ではとても敵はぬ策を練る

四月二十四日

草分も時世にうとい話する

埃り風やんでぽつきり水槽（ヲカタシク）

よつぽどの用事宵雨衝いて出る

四月二十五日

雑踏に出すには惜しい聲を持ち

信仰も迷も女が多いなり

幾颯と乙女の衣も春の色

四月二十六日

お彼岸の供養を偲ぶメスの鐘

○佛性と言はれる人で不倖

乳牛の聲も長閑な晝下り

四月二十七日

柵の中やっぱり止まぬ無駄費ひ

無駄だとは思ふが鐘を掛けて見る

○再起すま覚悟へ無駄な日が續き

四月二十八日

無駄骨を折てし悔ぬ我仕事

請願も効なくみんな微集され

無駄

○再話もう固き飽いた欠伸が出

四月二十九日

逆境も何の変らぬ鉄の意志

○冷鉄も打てば美妙の響あり

○春の陽をうけて鉄橋丸う見え

四月三十日

○ 完璧の守り四と鉄油なり

○ 鉄屑も粗末にすまい 長期戦 国家

○ 鉄兜 無念無想で土を蹴り

五月一日

春なれや セイジの原に蝶が舞ひ

沙漠原何を慕ふて蝶の群

柵の中明日は明日の風が吹く

五月二日

明日と云ふ希望くらつく二度の春

出所を明日に控へて氣が揉める

倖かまそうで明日を待ち侘びる

五月三日

入營は明日といふ子の肩の中

漠然と明日といふのに憧れる

自適する身にも明日の慾があり

五月四日

まざまざと個性が見へるメスホール

○夕焼が綺麗だねーと二人佇ち

月見れば又想ひ出す過去の事

五月五日

客○鯉幟五月の空の湯をはじき

吹流し柵の中にはふさはない

柵内の生活にそはぬ鯉幟

五月六日

○見て居ると妻の通りを子が真似る

○トラワレ
囚獄の心になって月を見る

○爆音の空に見つけた書の月

五月七日

○存分に土にまみれて子の機嫌

生き恥を積んでも死ぬ平和まで

どうにでもなれとそろそろ自暴が出る

五月八日

この時句よそにキャンプの詰将棋

人格を無視され幼児拗ねてゐる

信仰と別に女の頭數

五月九日

草分けも時世にうとい話する

天地崩れど我魂帰る所

帰還して見れば銃後は揉めて居る

五月十日

故郷へ帰る希望は捨て切れず

帰省して見ても喜ぶ親は亡し

親のない淋しさに居る帰還兵

五月十一日

全甲を貰って帰る子の威勢

言ひ勝った事を悔いてる帰り途

征った子の帰還の夢で夜が伸し

五月十二日

金魚など飼ってきやンプの未七人

釣逃し生命寡加な魚奴が

キャンテンで魚買ふ妻たしなめる

五月十三日

思ひきや沙漠の中で喰ふ刺身

人格を無視され幼児拗ねてゐる

空元気唄も長くは續かない

五月十四日

少年の夢は未未の大（ダイサイ）相

素晴らしい空想に生く少年期

○軍服に憧れがある少年期

五月十五日

○祝市川十偶氏初孫誕生

初孫に十偶さん丘の満を引き

初孫に出所する日の足軽ろく

五月十六日

○祝当田切美京氏結婚（柳澤夫人）

大老の未（エイ）に嫁す身の果報

新妻の姿なるかな紅い帯

此の上の懸は桃太郎抱き給へ

五月十七日

娘の婚儀自立ため程に母も涙り

客○銀婚に妻の白髪が目立つなり

○春麗ら女の薄着目立つなり

五月十八日

ぼんやりとして居られない子の背丈

○ ぼんやりと見へて成算立って居り

○ ぼんやりと物思ひ夜の灯が暗い

五月十九日

人⊙ 吹流し五月の空の陽をはじき

夕陽が沈んで映へる茜雲

暖い陽氣に草木身構へる

五月二十日

忠誠は俺達だけだ隔離組

居残って肩身がせまい五月晴

何時かまゐる平和祀上でプラン立て

五月二十一日

○ 隔離組南洋で旗を揚げる壯

○ 未知の国憧れもある志願兵

客⊙ 話だけ聞いてわからぬ父母の國

五月二十二日

○ 見ぬ国へ憧れもある青春期

特号の活字で飾るテマ二人

○ 号外の赤い活字にある魅力

五月二十三日

客⊙ 縮刷の活字が細い老眼鏡

次々に理想が消えて適齢期

客⊙ 窓の灯が次々消えて夜が更ける

停電に濡れなにかわめく聲

五月二十四日

同情に慣れてはならぬ無の誇り

同情が怖ぶが女弾ねつける

邪心なき同情いつしか恋となり

五月二十五日

征ず二世幸あれ世紀の人柱

陽焼した顔も頼母し農事班

○見透しかつがずプラニを立て直し

五月二十六日

「目見て娘のある家とうなづかれ

死ぬ迄は女に虚栄つき纏ひ

双子にも長短あるその個性

五月二十七日

小夜更けて蛙の聲に故郷想ふ

赤ん坊は泣くと眠りが日課なり

集會にまへてゐる女は編み續け

五月二十八日

二日隔き刺してた髭が三日隔き

金力に下げてはならぬこの頭

金の事協議に入り座が白ける

五月二十九日

頼られて見たいと思ふ金を持ち

小金でも持つて、氣強い旅の空

人間の醜を見る金の事

五月三十日

客の前母は目頭でたしなめる

ホルモンの事には觸れぬ長寿法

恥かしい返事顔中火と燃えて

五月三十一日

サンカーの説は時局と背馳する

興廢は長所短所にかゝるなり

×親の眼に長所短所のある子供

六月一日

短所だけ見へて長所に眼を覆ひ

春日人

長短を相補ふて共白髮

○長短はつきり見える試驗の日

六月二日

土砂降りに小さな義理は押延ばし

娘等の歸所すつかり変る部屋のうち

物事に捌けた人のこき使ひ

六月三日

自に見へぬ脳白だけに良い頭脳

統制が過ぎて烈しい闘相場

悲態はついても叔父の思ひやり

六月四日

良い腕をもつて・棟領寅に居る

名人と呼ばれいふせき長屋住

證據を握られてまた逃げ廻り

不意打を喰つて卑怯と悲鳴あげ

六月五日

卑怯とそしりをしつと我慢する

卑怯よと背に女の涙聲

卑怯だが百かは後ノ千女の史家任せ

六月六日

職構を稽に卑怯な落し穴

髮染めた妻を見直す誕生日

後添を貰つて父の若返り

六月七日

外所行の姿になつて妻若い

こつそりと若返る氣の緩る頁

鑄の娘何につけてもよく笑ふ

六月八日

この年齢で又自炊かと苦笑する

自炊して汝々妻の有難味

書休み晩のお副物を考へる

六月九日

蛤盛の名残美事なお茶道具

置忘れた茶器に触れてる妻の思郷

割長屋寄贈の茶器の置どころ

六月十日

興廢を賭けた安紀の第二線

夏めいて我物顔に蠅や蚊や

十砂降に哀れセンダーの花曲

六月十一日

夕立で型が崩れた夏帽子
寸土なほゆるかせにせぬ鍬をとり
朗らかな気分になれず腕を組み

六月十二日

家中で孫をからかう朗らかさ
一盃でとう然として父機嫌
子の為めに父黙々と農励む

六月十三日

○民族の指標となるパイオニヤ
天◎三代に勤めて秘書の老ひたま
○風流の果荷が重い帰り途

六月十四日

風流に凝って苦しい家計なり
風流の性質（タチ）へんぷくを飾らない
逆境へ兎角角妻のさし出口

六月十五日

指圖たすれば本足る父の齢
第二世英語で親に指圖する
フールスコープの鋭い眼の配り

六月十五日

虫の音が次第にさゆる初夏の夜
この暮し何時迄續く妻の思郷
柵の中脂粉に遠く妻の日々

六月十六日

○

三男も國に捧げて妻やつれ

○

妻の瞳にカラコロ欲しいものばかり

片言のおとけに妻もつい笑ひ

六月十七日

不惑過ぎ白髮が目立つ妻の髮

○

在宋の長さに觸れる妻の皺

看病に疲れて妻も同じ床

六月十八日

何時かも鳴る平和の鐘を待ち侘びる

○

寢そびれた枕へ列車の通る音

自衛台メスの響きも夢うつつ

六月十九日

天⊙ サイレンにそろ〳〵と外へ出る

○ 風邪の床矢鱈に響く蛙の音

作物が響く娘の晴衣裳

六月二十日

丹精の初穂に一家和む宵

出稼の沙々と知るわが齢

ペン持ってつく〳〵思ふ酒の毒

六月二十一日

動乱を他所にセンタの盆踊り

○ 夜業する眼上に横に天の川

○ 久し振り出す舗道灯が招く

六月二十二日

○ この辺で又自炊かと出所の荷

人の世は子故に泣いたり笑ふたり　風岩

出稼の縁の火地をしかと踏み

六月二十四日

何処迄も差別する気が貴らぬ酒

人魂の炎に真赤な月が出た

朝ぼらけ塩湖は煙を指呼のうち

六月二十五日

想像のつかぬ未来にある不安

想像して妻かたのうら再転住

大詰は想像として幕となり

六月二十六日

皆まで書かず小説終りなり

観客の想像にまかせ幕が下り

想像して胸がむかつく蛇料理

六月二十七日

想像をたくましゅして夜が更ける

終夜業して寝られない長夏の湯

寝不足で又父さんの八當り

寝不足の頭を嬲る青葉風

六月二十八日

片言の未だ寝足らない駄々をこね

寝不足の何でもないに腹を立て

寝不足へ薄は矢鱈ニヤソングー

六月二十九日

仲人はもうやりませんと十組出来
安評なぞ他所に安話好き貰って出る
安話好にされてブラックデレゲート
六月二十日

安話好にされて仲人背負ひ込み
忍従の征く子へ母の溜涙
隔離する群を見送る不安の瞳
七月一日

前線に三子を送った母の胸
又一人送った安紀の人柱
スクリーン今轉して一と昔

七月二日

○ 一瞬に映画は変る一と昔

⊙他 指の節苦労を語る一と昔

一と昔夢と過して悔ひ多し

七月三日

○ 恥かしさ耳まで染めて娘の起居

耳よりな話へ乗ろう膝頭

○ だらしない漢と知れる耳の垢

七月四日

遺物を矢鱈に欲しがる日本人

ピヤホール出て人混を遠慮する

環境にめげず素朴で押し通し

七月五日

○

纏まらぬ考へ一服吸ひつける

思案事うつかり炬に躓躓き

考慮の餘地かまだある再轉住

七月六日

考慮した心算が矢張り無駄となり

考へに詰つて天井睨めてる

指先に力をこめて左右なら

七月七日

七夕を祭つた逢が幾昔

○

鍵盤に躍る指先鮮やかに

指先の器用を語る細工物

七月八日

定刻になっても司會顔出さず

定刻ぎりぎりせまりざわめく貴賓席

定刻にようやく議長席に就き

七月九日

開幕が遅くれて騒ぐ素人劇

出勤が遅れて課長の冷い眼

一度きり覗いて雲に入ったまゝ

七月十日

一度きり逢った笑顔にある魅力

一度だけ猪口を手にしてふりかへし

白い物拾ってそっと確かめる

七月十一日

○ 乗車券拾って見れば時効すぎ

拾はれた小猫二三日落着かず

A.B.C.拾ひ読みする子と散歩

七月十二日

セイジ野で拾ったベルにある由緒。ユカリ

言譯を聞く家になった一雫

一雫落ちて涼しい青葉風

七月十三日

忍従の征く子に母の一雫

軍事便ひらいて母の一雫

釣竿の雫波紋の行方見る

七月十四日

親も子も尊い國の人柱

親子して荷物纏める再轉住

○

子には子の立場があって父默り

七月十五日

精靈を迎ふる術もないキヤシヤ

平和まで心で行ふ千蘭盆會

福光り女生徒の部屋騷がしい

七月十六日

○カンノ線青吏に光る百部隊

福光り第一線の子を想ふ

躾する母の瞼に光るもの

七月十七日

思愛の鞭 瞼に光るもの

骨壺へあきらめられぬ日が續き

この中に戰友が居る壺を抱き

七月十八日

硬骨は下積の日が續くなり

數々の逸話を残し逝った友

逆境の父母に従ふ素直な娘

七月十九日

四面楚歌ひるまぬ肚の我が力

根気よく古着を直す母の影

不良兒も何時かは負ける母の慈悲

七月二十日

書留の内容を訊く局の窓口

書留に係りの下目なペンの跡

嘲笑を見返へす心算 枉げぬ意志

七月二十一日

骨抜きになって議案は通過され

散華した戦友が居る家を抱き

また思癡る

○ 或り行に任せ切れず悩む中

七月二十二日

流行はどうあらう共好きな柄

○ 差別して乗せないバスへ唇を噛み

文化には遠く係線工金を留め

七月二十三日

時局とは別に信仰持つ続けの頃

○添乳のハツト系かつく熱かあり

喫ひならひまたきこちない。パイプなり

七月二十四日

又一人葬つて淋しい身の廻り

南洋のジヤングル想ふ原始林

無理にした預金フローズされたまゝ

七月二十五日

無理矢理に嫁つて破鏡の憂に居る

するくと汗が流れる午下り

するくと帯を解いた替衣室

七月二十六日

○ 順番に滑って飽かぬ辺り台

○ するくと蛇が横切るイキング

○ 脱白がするくと抜ける腋の下

七月二十七日

するくと温飩が消える咽喉佛

するくと帯を解けば花と塵

共同の出資へ朱我を通し

七月二十八日

共同でい備を防ぐ徊遊び

○ 儲かって行く共同の恙なし

共同の利害に二人の系が揃ひ

七月二十九日

妻の名を入れて事なき悲しい頭金帳

共同のお白粉姉はたんと塗り

。

共同の事業に個性出したかり

七月三十日

しつこく吠へ歩まぬ犬へ石が飛び

しつこくもあり哉秋の痩せた蠅

毒草にしつこい色の花が咲き

七月三十一日

支那料理とときにしつこい舌鼓

ごユの店非道く値切て怒らない

。しつこくも跡を追ふ兒に父は負け

八月一日

塗りすぎて其の職業を疑はれ

夏痩をからかはれてる新ニュホーム家庭

痩せた犬がへこ通りに忙がしい

八月二日

一呼吸毎に意識が甦り

平和迫るたはならぬ深呼吸

ピイエンドロ三嘆の息となり

八月三日

潜水夫パイプに命任せきり

考えぐと草木の呼吸も秋となり

矢の母心休まる暇もなし

八月四日　以後一ケ月分は速吟

的句

軍事便受取る母の日が震へ

するくと解けば香水匂ふなり

生命から次と云ふのを女持ち

八月五日

一體に丸味を見せる女服

花嫁の只おどくと二三日

新妻の取柄はまだ無邪氣なり

八月六日

向学に燃へてかすはぬ髪かたち

愛人を二れ見よかしに連れて来る

二十の娘恋に人目は考へず

八月七日

室内がぱっと明るい新家庭

御用聞き少し賑やかせる新家庭

オンス夫婦合は一人でメスの列

八月八日

茶漬食ふ音貧しきやうに住

娘のお客ぱっと賑しくお辞儀する

娘のお客そはくとして落着かず

八月九日

子沢山靴の數でも點頭かれ

自分だけ味噌つて変屈それでよし

人の事なんか聞かない変屈屋

八月十日

変屋の亭主に女房うつて来
眠つても握り飯の赤ん坊
片言の口真似みんなとつと来る

八月十一日

配達をすませて拔く講義録
代数になつて進まぬ講義録
痩せたのを我より先に人が知り

八月十二日

二十五の娘痩せよくくと苦心する
ダイエットで五斤減らして娘は得意
若鮎のやうに女将は痩せたかり

八月十三日

○ 默禱の瞼南洋の山や川

南洋の嵐に散った山櫻

「ジャングル」を血で彩ったサイパン島

八月十四日

蒼茫の血潮で染めたカロリーン

散華せし同胞想ふ鳴呼南洋

南洋の夢はジャングル椰子の月

八月十五日

興奮のやり場無ない子を叱り

見解相違も籍の西東

達筆のまた流かされる局のペン

何時見ても汚れた面のボイラマン

八月十六日

すらくと帯解いて居る川向ふ

笛から明け方笛に港暮れ

櫻摘み様子へ続く子を叱り

八月十七日

軒寝に小癪にさわる蠅の群

棚の中矢張り蒸なる作の出来

葉蔭から桃食べそゝる桃の色

八月十八日

○ 暑に七夏のローマンス

○ 天上の秋の半かう七夕や

天の川はまれて住む女夫星

○ 雨の音旅愁の迫る初老過

八月十九日

郷愁のヒシヒシと迫る虫の聲

中の聲が想ふ故郷の夏

尋ねの校長赤い髮だった

螢雪の効これからが活社會

八月二十日

高島田結ふて妹他人めき

高島田蓋々長い顏になり

高い鼻女の顏が險に見え

八月二十一日

幾人を欺くだらう赤い唇

聲変りそろそろ人生分りかけ

嬉しさをじっと耐へて胸を抱き

八月二十二日

素人にしては素敵な咽喉を持ち
晩時計女かはめてなまめかしい
禿頭光る話を聞きとがめ

八月二十三日

道連れの女の髮がよく匂ひ
ヘヤネットお釋迦に似たる頬になり
頬杖の壁を睨んで時が経ち

八月二十四日

眼隠しをされて脂肪の白とわかり
芝居とは承知で悲劇涙かされる
水洟の出たのも知らず齢になり

八月二十五日

初笑ひ可愛い乳歯かたゝ二本
ありたけの聲張り上げて母の留守
口笛で嘘をごまかす男の子

八月二十六日

何事も肩が波打つ忍び泣き
寝轉んで天井の節穴數へてる
両膝をはだいて居職書に立ち

八月二十七日

胸を病み美しいまゝ痩せて行き
薬瓶また取かへて病んで居る
粉薬のにがさ思はず目をつむり

八月二十八日

病より母が喜ぶ見舞客

お通夜に慶らしい顔が寄り

女学生一人笑へば皆笑ひ

八月二十九日

塾の子にどうにもならず涙くみ

病みとりこれからアンヨの稽古なり

病院の窓を訪ふ青葉風

八月三十日

デンテスト子の瞳は怖い道具だて

引張て子供に見せる池の鯉

結髪が一銭だった名が残り

明治初年から四十年位迄

八月三十一日

自早くと頼めば床屋念を入れ
変梯なものを被せる美容院
人不足故世事に少人数

九月一日

素晴しい抱負で男旅に老ひ
代診の見立て患者承知せず
晩よりは漂泊で流行る女床

九月二日

足のない乞食いつものとこに居り
足のない乞食にダイム入れてやり
自轉車の曲乗りはつと難を避け

九月三日

竹切れで首をすげてる人形屋

打續く暴風雨に魚屋だゝ賣い

仰山に怒鳴り上キストラよく売れる

九月四日

故本多葉芽先生の三週忌命日

師の君の寒禍祈る三週忌

黄ふ迫玩張る肚の鼻金人

こゝろナルを無視し非道く叱られる

交換日怒った様な調子なり

九月五日

開閉に娘の育ち窮はれ

エバキュの我骨埋める処なし

征った子に何やら母の胸さわぎ

九月六日

赤ん坊の耳を侵めてる白鼻立ち

雨風につけ前線の子を想ふ

秋三度そぞろに想ふ故郷の父母

九月七日

怒りぽくなった我齢淋しかり

意地張って後悔する四十過ぎ

今食べたばかりお茶まで遠慮する

九月八日

出稼の系張って見ても高が知れ

取締役出て罷業は名を変へる

飛来は心臓の鼓動が止らない

九月九日

若菜で居て失礼な朝となり
を起きかへる

利かぬ気は赤席からぬつと立ち

赤席が鈴計にはずむ無礼講

九月十日

代表は赤席に居て辯が立ち

お給仕の赤席迫は廻り兼ね

披露宴嫁御を覗く端の席

九月十一日

善後策吐息計りで夜が更ける

油断して青息吐息の年の暮

吐息する母の額の深い皺

九月十二日

娘の吐息流石に母は見逃がさず

カーテンの影で女は吐息する

馬車馬の吐息が荒い急な坂

九月十三日

垢まみれ長屋の子等のよく育ち

何時の間に斯うも溜った耳の垢

病み上り垢のつまんまで縁に坐し

九月十四日

獨身の汚れたまゝのシャツで居る

自轉車で来た娘若さがあふれてる

動作にも若さが自ふ十八九

九月十五日

散髪をして三つ四つ若く見え
看護婦の一枚脱ぎはまだ若い

若い弟で居ても疲がどっと出る
九月十六日

張り合った祖母もいつしか白髪なり
むっちりとした腕の腕時計

若き日の癖が直らぬ四十過ぎ
九月十七日

落ぶれてうつ向いて往く癖がつき
床屋またいつもの癖で掴むなり
酒癖があって存在認められ

九月十八日

禁煙の札の真下で煙草癖

新調の靴も同じく減り工合

親に似た短慮の癖が直らない

九月十九日

ピッチャーの癖がわかってよく打たれ

起き抜けに一服つける癖があり

禿すかり目深に被る癖がつき

九月二十日

人生は孫算通りにいかぬもの

町に出て妻の孫算が狂ひ出し

後添は孫算の通りに切り通し

九月二十一日

削られてやつとパスする稼業

打續く不幸へ稼業立てられず

台所の稼業は妻のお母の心の

九月二十二日

秋の山青年の意氣そゝるなり

世に拗ねて自然を友に住む家なり

セイシ野の自然何らのへんもなし

九月二十三日

頂に立て下界を小さく見る

落葉かく下にタンポポ咲き残り

そこら中葉落て埋める風の後

一九四四年城南句集巻一 終り